

スポット企画展「太宰治の逸品」

令和元年 6 月 22 日～8 月 31 日

太宰治の数ある資料の中でも、紹介される機会が少なく、太宰の人間像を感じさせる資料 13 点を「逸品」として取り上げて紹介した。

『広辞林』（個人蔵）は、太宰が官立弘前高等学校時代に愛用していた三省堂の辞典で、昭和 2 年 10 月 2 日刊（32 版）、定価は 3 円 90 銭である。中には人物の顔のほか、「あはれ蚊や」「妓」などの落書きがある。太宰は『弘高新聞』第 6 号（昭和 4 年 5 月 13 日）に掌篇「^{あはれが}衰蚊」を發表しており、同作は、後に一部改変されて「地主一代」「葉」に挿入された。

「根市良三 『思ひ出』装画」（青森県立郷土館蔵）は、昭和 8 年 6 月、太宰が同人雑誌『海豹』に掲載した「思ひ出」と「魚服記」を切り取って綴り、手作り本をつくった際の表紙に使用した木版画である。檀一雄は、この表紙について、「少女雑誌の挿絵風に可憐な薔薇が一輪描かれてあった。」と回想し、また、「思ひ出」と「魚服記」を読んだ際には、「作為された肉感が明滅するふうのやるせない抒情人生だ。文体に肉感がのめりこんでしまっている。」と、太宰の中に「天才」を見て取り心酔するようになる（『小説太宰治』審美社、昭和 43 年）。この後、檀は私財を投じて雑誌『鶴』を創刊、太宰の第一創作集『晩年』出版のために奔走した。

このほか、太宰の下宿先である藤田豊三郎家の長男・本太郎の日記「藤田本太郎日記」（個人蔵）、「阿部合成 太宰治碑のためのデザイン素描」（青森県立美術館蔵）などを展示した。

スポット企画展「青森県郷土作家研究会 60 周年」 開催中

令和元年 9 月 1 日～10 月 31 日

（最終日は午前中のみ展示）

本展は、昭和 34 年 1 月 13 日に創立され、創立 60 周年を迎えた青森県郷土作家研究会の地方文学探究の軌跡を、機関誌『郷土作家研究』と研究著作を通して紹介している。主な研究著作は次の通り。

小山内時雄『近代諸作家追跡の基礎』、小野正文『北の文脈 青森県人物文学史』4 巻、工藤与志男『青森県短歌俳句史』、相馬正一『若き日の太宰治』、藤田龍雄『秋田雨雀研究』、風穴真悦『地方文学史愁々』、加賀谷健三『加藤東籬全歌集』、佐藤幸子『北畠八穂の物語』、森英一『石坂洋次郎の文学』、館田勝弘『青森の文学』叢書 4 巻、斎藤三千政『青森県ゆかりの文学』4 巻、相馬明文『太宰治の表現空間』。

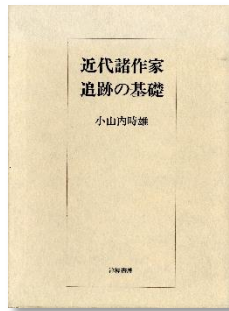
これらの著作の序文・跋文からは、研究当時の厳しい状況や、強い決意・真摯な姿勢が伝わってくる。

『若き日の太宰治』跋文…「太宰文学をストーリー・テラーの文学として特徴づけると同時に、いわゆる私小説を内側から克服しようと試みた独自の昭和十年代文学として捉えるためには、作家以前の太宰を一日も早く伝説の世界から解放しなければならないのです」。『石坂洋次郎の文学』跋文…「これまで我が国の近代文

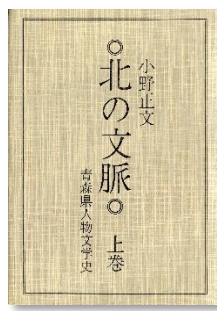
文学の評論や研究といえば、いわゆる純文学のそれに集中していた。（中略）なぜ、大勢の読者の存在が無視されるのか。大衆が魅せられる作品は分析や解明に値しないのか。本書を執筆した理由のひとつはこのようなところにある」。



『郷土作家研究』創刊号
昭和 34 年 10 月 20 日



小山内時雄 著
『近代諸作家追跡の基礎』
津軽書房 昭和 56 年 11 月 30 日刊



小野正文 著
『北の文脈 青森県人物文学史』上巻
北の街社 昭和 48 年 11 月 25 日刊

文学散歩 今官一生誕の地を歩く

講師：櫛引洋一

令和元年
5月25日(土)
午前10時
～11時半

今年は太宰治生誕110年ですが、今官一もまた同じく生誕110年を迎えました。太宰と生涯にわたり深い絆で結ばれていた官一の幼少期や作品に対する思いなどを、ゆかりの地を巡りながら知っていただくとう企画したものです。涼しい季節のはずが、当日は記録的な猛暑で、最高気温32℃と日差しが強い中で文学散歩となりました。



追手門広場（東奥義塾跡地）
官一は東奥義塾に学び、文学者を目指すきっかけとなった福士幸次郎に出会う。

今官一文学碑
平成18年12月8日、官一の誕生日に建立された。



新町坂
石坂洋次郎ゆかりの地。眺めが最高！



玉田酒造
貞享2年創業、弘前藩御用達の酒蔵。蘭庭院の御用達でもあった。官一の父は国鉄職員でありながら、蘭庭院に婿入りし、官一は小坊主として修業、お酒の管理をするのがお勤めだった。試飲できるおしゃれな喫茶店のようなところは、この日はお休みとのこと。…残念…



『壁の花』
官一が青森県初の直木賞を受賞した『壁の花』は作品集の表題であった。「壁の花」とは、自分の性に合った人としか踊らないため、壁際に売れ残った踊り子の意。そんな踊り子に自分を重ね、作家としての生きる姿勢を表している。

一戸謙三詩碑
詩人・一戸謙三は福士幸次郎の門下生で、官一の兄弟子である。小説でメシが食べなかった時代、一戸謙三の励ましに助けられ、のちに先輩は後輩を励ますためにあるのだと、身をもって教えられた。



禅林街
官一は自分の幼少期や過去の事を書かない人であったが、禅林街やお城の濠ばた道を母の背に負われながら、「金魚ねぶた」を持たされ通ったときの母のかすかな思い出を『KONKAN 津軽ぶし』に書いている。

清安寺
太宰治にゆかりのある寺。太宰の内縁の妻・小山初代の墓がある。官一は『思い出す人々』で初代に出会った時のことを書いている。「もし可愛い女をあげよと言われたならば、ぼくは、ためらうことなく、小山初代さんの名をあげるであろう。(省略) 思えば、初代さんの一生の内の、最も幸福な時期につきあったのかもしれない」



蘭庭院
官一の生家である寺院。墓石には先祖代々の墓と刻んでいるが、裏には父・今官吾の名前が記されている。
戒名 幽玄印純文官光清居士

散歩を
終えて

「官一ほど津軽的なものを総合した、じょっぱり、ダンディズム、暗く沈んだものの中から何かを見つけ出す人はいない。」と研究者たちが評価していると説明がありました。官一は、津軽を否定する文学を目指しながら、亡くなる前には故郷への感謝の言葉を残し、73歳の生涯を閉じたそうです。
参加者全員で、墓前に献花、お線香を手向けました。それぞれの思いで手を合わせたことでしょう。

次回の
文学散歩

10月5日(土)、「太宰治ゆかりの地を訪ねて」と題し、太宰治や加藤謙一、安岡章太郎のゆかりの地を訪ねます。申込は当館まで。締切は9月30日(月)。ぜひご参加ください。